

北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第15号



平成20年6月

J. Hanai

目 次

1	着任のご挨拶	長尾 義信	2
2	日本語弁論大会	松岡 晶子	2
3	現在の大学生	Andi Nofita	4
4	看護師・介護福祉師導入にむけて	上杉 祐子	6
5	スラウェシに於ける領事館の推移と 戦前（昭和 14 年頃）の日本人会の状況	松田 勲	7
6	モアイ像のルーツか？「巨大石人パリンド」 の謎によせて	羽根井義博	13
7	エチオピアについて	石野 赫	19
8	その後の NPO 法人手火山について	川口 博康	22
9	飛魚（トビウオ）	長崎 節夫	26
	編集後記		32

ご挨拶

在マカッサル日本国総領事館
副領事 長尾善信

はじめまして。マカッサル総領事館の長尾善信と申します。4月18日に、佐藤副領事の後任として赴任いたしました。インドネシアは、初めてで日々新たな発見があり、楽しく生活しております。皆様とは、戸籍・国籍、証明書作成、在留届、在外選挙登録等でお会いしたり、お話しする機会もあるかと存じますが、その際はよろしく願いいたします。

日本語弁論大会

副領事 松岡晶子

在マカッサル日本総領事館は、国際交流基金との共催で、5月24日(土)、マナド市内サヒッド・カワヌワ・ホテルにて、2008年度日本語弁論大会スラウエシ予選を開催しました。本年度が50周年の記念の年にあたるため、通常より大規模に、300人の大ホールを貸し切って行われました。大会の冒頭、日本インドネシア国交樹立50周年記念DVD「Benang Merah～赤い糸～」が上映されました。その後、マナド国立大学日本語学科の学生による日本の踊りの披露に引き続き、全スラウエシから集まった日本語学習者10名による弁論発表が行われました。

審査員は、北スラウエシ日本人会代表幹事の平野健氏、マカッサルより出張した総領事館の松岡副領事、JOCV日本語隊員としてマナドで活動中の東田明子さん及びその後任の太原徹雄さんの4名でした。司会は、マナド国立大学のフランキー・ナヨアン先生が務めました。

厳正な審査の結果、全国大会への出場権を得る栄えある第一位は、南スラウエシ州マカッサルの国立ハサヌディン大学日本文学科の生徒、アンディ・ノフィタさん。弁論のタイトルは「現代の大学生」。デモや喧嘩ばかりして、勉学に集中しないマカッサルの学生について、痛烈に批判しました。第二位は、マナド外語短期大学の学生、グラディス・カリギスさんの「ねずみ」。自分の干支であるねずみ年について、そして、マナド人のねずみを食用する習慣についてスピーチしました。第三位はやはりハサヌディン大学日本文学科の学生、アクマル・ジャヤ君による「借金の習慣」。「インドネシア人の学生は、頻繁に借金をする習慣があり、とても悪いことである。」としながらも、「そうした学生の一人は自分です。」と自虐的にスピーチし、会場の大爆笑を誘いました。

審査員長努めた平野氏は、審査員講評の中で、「もう少し、内容に工夫が欲しかった。」とコメントしました。また主賓を務めたマナド国立大学のヨッピー・リアンド副学長

は、「兼ねてより、スラウェシと日本の関係を非常に長く、深い。本日の弁論大会をはじめとする、50周年の様々な文化行事を通じて、日インドネシアの友好関係のさらなる発展が望まれる。」と挨拶しました。

優勝したアンディ・ノフィタさんら、7月にジャカルタで行われる、全国大会に出場します。

現在の大学生

Andi Nofita

おはようございます。

皆さん きょうは 現在の大学生 について 考えてみたいと思います。

中学校のとき、大学生に関心しました。なぜかという、そのとき、私の学校では、教育実習生が、多かったです。その大学生は、私たちに、おしえてくれていました。頭もよかったし、頭の回転も速かったし、それに、行儀もよかったと思いました。それから、いつも、優しく、ふくそうもきちんとしていて、とっても、すばらしく見えました。

しかし、今、私が大学生になってみると、昔感じていた大学生のイメージは変わりました。現在、大学生は、知識人のように見えず、不良青年のように見えると思います。みなさん、最近、義務を自覚しない大学生が増え始めました。大学生たちは、暇なとき、勉強せずに、遊ぶことが一番好きだと思います。

たとえば、ほかの大学で、サッカーの試合のとき、相手のグループに、まけただけで、そのグループは、ぼうどうをおこしました。ほかのたとえば、デモをしているとき、大学生たちは、何か必要でないことをして、タイヤを燃やしながらデモをしています。こんなことをしたら、知識人のようにみえません。

私はデモがいけないことだとは思いません。しかし、デモするときは、ほかの人に迷惑をかけないようにする必要があります。

もし、デモをするなら、よい方法で、デモをしましょう。

みなさん、この間、大学生の喧嘩があつて、おたがいに、いしをなげ合いました。数人の犠牲者が出て、それから、大学の設備も壊されて、教室のガラスも、割られてしまいました。ついに、学長は、講義を中断しなければなりません。その喧嘩の理由は、女性についてだったのです。これが大学生のすべきことですか。

私は同じ大学生として恥ずかしいです。そのとき、日本の大学生がいたので、「日本では、大学生の喧嘩がありますか。」と聞きました。彼らは「ううん、大学で喧嘩する学生はいないよ。」とわらいながら、こたえてくれました。

私は、そのとき、とっても恥ずかしかったです。みなさん、このことが、もう一度、起きた場合に、一番被害を受ける人々は私たち大学生自身です。

皆さんは、もう大学生ですから、ほかの人を困らせるようなことをしないようにしましよ

う。そして、もっと、自分に責任を持ちましょう。たとえば、教室で、講義がわからないとき、だまっていなくて、せんせいに、聞きましょう。

それから、ひまなとき、友達と勉強会などを、したほうが良いと思います。

大学生みんなは、将来のために、これからも、よく勉強して、ほかの人に、むやみやたらに、扇動されないようにしまあよう。大学生たちは、頭もよいので、自分で、自分に、役に立つことをして、もっともっと、がんばったほうが良いと思います。

これからは、自分でよく考え、自分の意見をいい、せきにんをもってふるまったほうが良いと思います。

どうも、ありがとう、ございました。

現在、私は大学の IT(情報技術)専攻卒業生を IT エンジニアとして日本派遣するための日本語研修をしています。日本は少子高齢化ということだけでなく、企業の IT エンジニアが不足していることから、外国人技術者、たとえばインド人、中国人、韓国人などが日本で働く姿が見られました。インドネシア人技術者はほとんどいませんでした。2006 年よりジャカルタで始まったプログラムで、第 1 期生 13 人がすでに日本で活躍しており、第 2 期生も今年 5 月末から少人数ですが日本へ渡航しています。その研修生たちに「インドネシアから何を輸出していますか」と問うと、「人です。私たちです」で答えるのですが、高度な技術をもった人材を受け入れるという日本は、決して労働力不足だけでインドネシア人技術者を求めているわけではないと思いますが、日本語を一生懸命教えて、日本で仕事ができるように養成している立場としては、苦笑するしかありません。

さて、昨年 8 月に署名した日本インドネシア経済連携協定(EPA)に基づき、看護師 400 人、介護福祉士 600 人の計 1000 人を受け入れるそうですが、初年度の今年は、それぞれ半数が渡日する予定です。看護師はインドネシアの看護師資格を持ち、2 年以上の実務経験があること。一方、介護福祉士は大卒で半年程度の介護研修を修了しているか、インドネシアの看護師資格を持っていることなどが要件となる、という報道がありました。フィリピンが 2006 年に EPA に署名はしたものの、国内法が批准できずに足踏みして間に、インドネシアからあつという間に看護師、介護福祉士が日本に渡り、医療・福祉分野で初の本格的な外国人労働力の受け入れが実現することになるわけです。第 1 陣は 8 月上旬までに渡日し、半年間、日本語研修などを受け、看護師は 3 年以内、介護福祉士は 4 年以内に、働きながら日本の国家資格取得を目指します。取得できなければ帰国、国家試験に通れば日本人と同じ条件で働き続けられます。

ここでまず問題になるのが日本語力であることが予想されます。フィリピン人導入のために、日本語教育機関が準備した指導内容をそのままインドネシア人に適応して始められることになりそうです。しかし、IT 技術者に 1300-1500 時間で日本語能力試験 2 級レベルを習得させて、日本へ行くことがどれだけハードであるか知っているだけに、看護師、介護福祉士の道も遠いと思います。それに仕事の性格上、看護師は生命に関わることだし、介護福祉士はお年寄りとコミュニケーションをとることが要求されます。インドネシア人の陽気でまわりの人をなごませる性格を活用する前に、「日本語」の壁が立ちはだかっています。

しかし、世の中はすでに先の動きを読んで動いている人がいます。私が以前教えていたミナハサ日本語研修センター PPBJ はインドネシア人日本語講師だけで、4 月から再開しています。その柱となるコースは、トモホンの看護学校を卒業して看護師資格を持つ若い女性たちの渡日前研修で、やがて日本へ行って、老人のための施設で働くことになるということです。まだ、彼女たちに会っていないので実際のところはわかりませんが、希望をもって日本へ行くために勉強しているのですから、どうか日本で働くことができることを願っています。

スラウェシに於ける領事館の推移と 戦前(昭和14年頃)の日本人会の状況

松田 勲



目次

まえがき

1. 領事館の推移(戦前、戦後)
2. 戦前(昭和14年頃)の日本人会の状況

— 左の写真 昭和16年3月23日
在マカッサル大日本帝国領事館開館記念

まえがき

取り敢えず入手できました資料を基に標題について箇条書きに纏めてみました。顧みますと、昭和14年という年は、5月中旬に起きた満州国境のノモンハン事件の結末が影響し、またその前年の「東亜新秩序」の発表などとあいまって、やがて南進政策が企画されようとしていた時代でした。

ところが、資料によりますとセレベス島にはもう既にこの年、かなり多数の日本人が在留しております。ということはこれら日本人在留者は、自ら求めてセレベス島に渡って行ったことになりませんが、はるか海を越えてゆくことをもたらした、惹きつける何かがこの島にはあったということでしょう。たとえば、北部セレベス島モゴンドウでコーヒーその他有用栽培物を栽培する農園が日本人によって経営されていましたが、これを可能ならしめた何かがあったと推測されます。マカッサルなど他の地区でも同様のことが言えると思われれます。

他方、これら日本人在留者を受け入れた現地側の実情はどんな状況だったのでしょうか。この点は大いに知りたい所ですが未だ資料にお目にかかっておりません。更に遡って草分け的な先人たちの状況、これらの方々を含め日本人在留者の残した足跡、遺産、そしてこれらが現地の社会にどう融和し受け継がれているか等調べる価値のある課題が多いかと思われれます。

1. 領事館の推移

(戦前)

(1) 在メナド領事館

昭和12年12月18日に開設。バタヴィア、スラバヤ、メダンに次いで第4番目の領事館。昭

の事情については資料見当たらず。この領事館が開設される以前は、当地域は在スラバヤ領事館が担当。

(2) 在マカッサル領事館

昭和16年2月22日に開設。第5番目の領事館。従ってスラウェシ(当時はセレベス)には二つの領事館が開設されたことになる。しかし同年12月8日には閉鎖。この領事館が開設される以前は、スラバヤが当地域を管轄し、メナド領事館はその開設後もこの地域を管轄していなかった。

(3) 他の地域の領事館

バタヴィア、スラバヤ、メダンの状況は次のとおり

(イ) 在バタヴィア領事館 — 明治42年2月14日開設、昭和16年12月8日閉鎖。

(ロ) 在スラバヤ領事館 — 大正9年3月13日開設。昭和16年12月8日閉鎖。

(ハ) 在メダン領事館 — 昭和3年3月26日開設。昭和16年12月8日閉鎖

(戦後)

次に戦後の推移に関しインドネシア全体について時系列的に記すと次のとおり

- (1) 昭和26年11月22日ジャカルタ在外事務所開設
- (2) 昭和27年8月5日在外事務所が廃止され、在ジャカルタ総領事館開設
- (3) 昭和27年8月5日スラバヤ領事館再開
- (4) 昭和33年4月15日日本国とインドネシア共和国との平和条約及び日本国とインドネシア共和国との間の賠償協定が発効。同日、在インドネシア大使館開設
- (5) 昭和35年12月15日在メダン領事館再開
- (6) 昭和52年1月10日在ウジュン・パンダン総領事館開設(平成13年4月1日名称が在マカッサル総領事館に変わる。)

2. 戦前(昭和14年頃)の日本人会の状況

- (1) スラウェシ(セレベス)島に於ける最初の日本人会は、大正4年に創立された「メナド」日本人会。次いで大正7年にマカッサルに「マカッサー」日本人会が創立され、更に大正9年に「ブートン」日本人会(ブートン島)、昭和8年に「モゴンドウ州」日本人会が

創立された。なお、「モゴンドウ州」日本人会は「メナド」日本人会から分離して創立されたもの。

- (2) 他の近辺の島(現在のマルク州内外)では、メナド領事館の管轄内に「テルナテ」日本人会(昭和6年8月創立、会員24名)、「アンボイナ」日本人会(大正8年5月13日創立、会員30名)、「ドボ」日本人会(明治38年5月27日創立、会員76名)が存在した。

(3) 「メナド」日本人会

(イ) 会員数 186名(メナドおよび附近の在留邦人)

(ロ) 会の目的 会員相互の交誼を深め、共同利益の増進を計る

(ハ) 登記 昭和10年12月7日付け蘭印政府に登記完了。(蘭文会則テキスト別添)

(ニ) 活動・業績

○ 昭和12年12月9日政府の補助で小学校を開校。仮校舎を建設。(下記(註)参照)

○ 邦人発展上の諸般について斡旋援助—即ち内外官公署との交渉、重要諸事項等の通達、入国手続き、居住券書き換え、納税、警察事故等の弁明、和解、諸願届の代行、会報、ニュース等の発行、名士から講演を受けるなど。

○ 台湾、沖縄、南洋等より漂着漁船乗組員の保護、送還、船体処分、帰船費の立替、救助費の支払いなど。過去10隻の実績あり。

○ 居住券の権利喪失せる者相当数あり、会の斡旋援助により過半数は権利復活を見る。

(註)「メナド」日本人小学校の推移

- (a) 昭和10年度—生徒数、第一学年9名、第二学年2名、第三学年4名、計15名
- (b) 昭和11年度—第一学年6名、第二学年5名、第三学年2名、計14名
- (c) 昭和12年度—第一学年1名、第二学年11名、第三学年4名、第四学年2名、第五学年2名、計20名
- (d) 昭和13年度—第一学年2名、第二学年3名、第三学年11名、第四学年2名、第五学年4名、第六学年1名、計14名
- (e) 昭和11年8月内地より全科目担当教員1名(准教員)が着任。音楽・衛生

担当の女性教員(無給)との二人体制。年度は9月1日より翌年3月31日まで。授業日数は168日。

(4) 「マカッサー」日本人会

(イ)所在地 セレベス島マカッサー市

(ロ)創立 大正7年5月

(ハ)会員数 124名

(ニ)会長 村田益太郎

(ホ)その他 教育基金を設けているので何らかの在留子弟に対する教育を行っていたと思われる。それ以外については資料がなく不明。

(5) 「ブートン」日本人会

(イ)所在地 セレベス島ブートン島

(ロ)創立 大正9年9月1日

(ハ)会員数 12名

(ニ)会長 尾田勝蔵

(ホ)その他については、資料なく不明。

(6) 「モゴンドウ州」日本人会

(イ) 所在地 蘭領東印度セレベス島モゴンドウ州モダヤ

(ロ) 創立 昭和8年5月1日。従来「メナド」日本人会モダヤ支部として存続してきた、しかしメナドとは極めて遠隔セル地理的關係その他特殊事情に鑑み別個独立セル日本人会を組織。

(ハ) 会員数 正会員14名、準会員38名

(ニ) 会の目的 邦人相互の親睦・共栄を計り、併せて当地方官憲及び一般外国人との和親を増進し、以って帝國臣民としての品位と信用を向上セシム。

日本人会ではないが邦人実業団体等として、「メナド」日本人商業協会、モダヤ邦人農園組合、沖縄県人会(メナド)、蘭印産業組合(アルー島「ドボ」)が存在した。

(7) 「メナド」日本人商業協会

(イ)創立 昭和9年3月

(ロ)会員数 7社

(ハ)会の目的 会員の強調連絡を図り、共同利益を増進セシム

(二)会長 セレベス興業合資会社 長野 智

(ホ)活動 創立後、蘭印経済省、監督官庁の公認するところとなる。

商業に関し、主要事項は、欧州人および支那人商業協会と同様電信・書信を受け、邦商の利益に供す。

理事のうち1名は、メナド税関より対日輸入商品に対する評価委員として選任せらる。蘭印日本人商業協会聯合会に所属し、同会より諸法令、商業・事業関連事項統計類の訳文送付を受け、全会員に配布している。

(8) モダヤ邦人農園組合

(イ)創立 昭和11年2月1日

(ロ)組合員数 9名 モゴンドウ州モダヤ又はモダヤ附近在留邦人として農園を経営する者を以って組織す。

(ハ)活動、事業、業績

- 珈琲その他有用栽培物の栽培
- パラ、丁子、カポック、トバ、水陸稻その他の栽培試験
- 収穫物の共同販売、日用品の共同購入
- 組合資金の積み立て、借入れ、又は組合員への融資等、業績未だ顕著ならざれども将来これらに付き充実の要あるべし
- 積年生産物価不況の為、資金積み立て容易ならず、従って組合の維持運用に困難なるも、出来る限り互いに精神的協力を計り、目的達成に努めつつある

(9) 沖縄県人会

(イ)所在地 メナド(メナド、トンセラ、ビートン)

(ロ)創立 昭和12年1月3日

(ハ)会員数 85名

(二)会の目的 会員相互の交誼を厚くし、共同して利益を計る。

(ホ)活動・業績 昭和13年来「ビートン」における沖縄県人子女の為、不完全ながらも日本人小学校の授くべき教育を施している。

(10)

蘭印産業組合

(イ)所在地 蘭領東印度「アルー」島「ドボ」

(ロ)創立 昭和11年7月1日

(ハ)組合員数 邦人7名、土人(?)2名、計9名

(ニ)組合長 浦中 久吉

(ホ)目的 産業に必要な物品の購入・漁獲物の共同販売

バタヴィア日本人会 会員 292名 大正2年創立

スラバヤ日本人会 会員 479名 大正15年創立

スマトラ日本人会(メダン) 会員211名 明治30年創立

新嘉坡日本人会 会員787名 大正4年創立

マニラ日本人会 会員2,325名 大正13年創立

マカッサル	83名
マナド	17名
ビトゥン	10名
クンダリ	24名
ソロン	13名
ジャカルタ	8,102名
スラバヤ	550名
インドネシア全体	11,221名

注:この資料は外務省外交資料館に保存されている多数の資料その他を元に取り纏めたものです。

写真出典:昭和50年9月1日発行の図南春秋 第10号 中居台介「マカッサルの先駆者たち」より

掲載:2008-5-9
一部修正:2008-5-13

[Index](#)

[Back](#)

[Next](#)

「モアイ像のルーツか？巨大石人パリンドの謎」に寄せて

羽根井 義博

本会員の石野さんから、2007年12月1日TBSの「世界ふしぎ発見！」で、ビトンが放映される旨の電話がありました。早速テレビのチャンネルを合わせました。番組では、ビトンの鯉節工場がクイズとして出題されました。

話題はスラウェシ島中部の巨大石像の話でした。不思議な石像だったので、ご報告いたします。

スラウェシ島には、あの有名なイースター島のモアイ像のルーツか？と言われている謎の巨大石造パリンドがあるということで、番組が始まります。

パリンドは、タナトラジャの近くに位置する、ロレ・リンドゥー国立公園内にあります。その国立公園の広さは東京都位だそうです。パリンドにたどり着く途中にも、様々な石像を紹介していました。それは、特にここというわけではなく、田んぼや野原などにありました。人型や動物型など、どれも表情豊かで、どことなくほのぼのとしていました。由来など解からないそうですが、基本的には先祖が、今の自分たちを見守ってくれている事の象徴ではないか、との事でした。

さて、問題のパリンドですが、写真を載せておきます。かなり大きなもので、表面はすべすべに磨かれているそうです。



果たして、パリンドはモアイ像のルーツなののでしょうか。という問題提起で番組は終わります。

さて、パリンドがモアイ像のルーツだとすると、スラウェシ島から、遙か彼方のイースター島まで、太平洋を巨石文化が伝わって行ったことになります。

その広大な太平洋には、ニューギニア島やソロモン諸島、フジー諸島が属するメラネシアの島々、パラオやマーシャル諸島、マリアナ諸島の属するミクロネシアの島々及び、ハワイ諸島、イースター島、ニュージーランドを結ぶ三角形の中にあるポリネシアの島々、が点在しています。

なんとこの地域は、先史時代から文化的交流があったそうです。オーストロネシア系といわれる民族が、長い年月をかけて原住民と接触しながら広がっていったと考えられています。キャプテンクックのようなヨーロッパ人がこの地に到着した時点で、すでに相互に似通った言語を用いていたそうです。

太平洋の島々に人々が交流するには、遠洋航海の技術が必須です。つまり、

驚くべきことに、このような太古の昔、コンパスや六文儀、正確な時計も用いず、何千キロもの遠洋航海が可能であったこととなります。

インドネシア スラウェシ島においては、2007年7月に日本人の山本良行さんと、インドネシア人の冒険家3名が、西スラウェシ州の伝統船サンデックを復元し、古代と同じ航法で黒潮街道を縦断しました。それは、2ヶ月と10日をかけて名古屋港に到着するという、約5000kmの大航海でした。

サンデックは、西スラウェシ州のマンダール民族に伝わる、アウトリガーを左右両方に二本装備した古代の航海帆走カヌーです。実際に航海したサンデックは、スシロ大統領に「Sandeq Explorer」と名付けられた、長さ16.7m、幅1.27mの大きさの船でした。

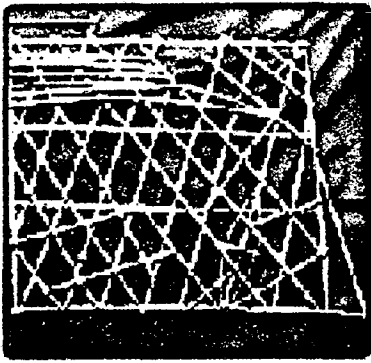
途中、沖縄沖で転覆するという危険な出来事もあったそうですが、山本さんをはじめ、インドネシア冒険家の勇気と技術でこの大航海は、成功しました。



Sandeq Explorer

ミクロネシア人は太古から、高度な航海技術を持っていたことが知られています。離島の影響で、波が変化することを知っていて、押し寄せる波のパターンで、水平線で見えない離島の位置を特定したと言われていています。そして、そ

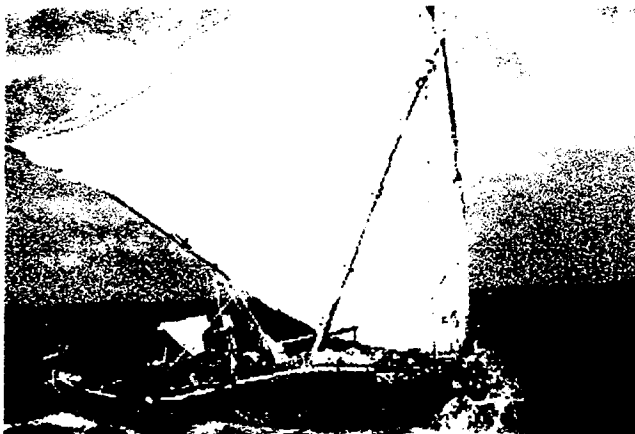
の位置を、棒とコヤス貝で表した「スティックチャート」と呼ばれる海図を作っていました。



スティックチャート

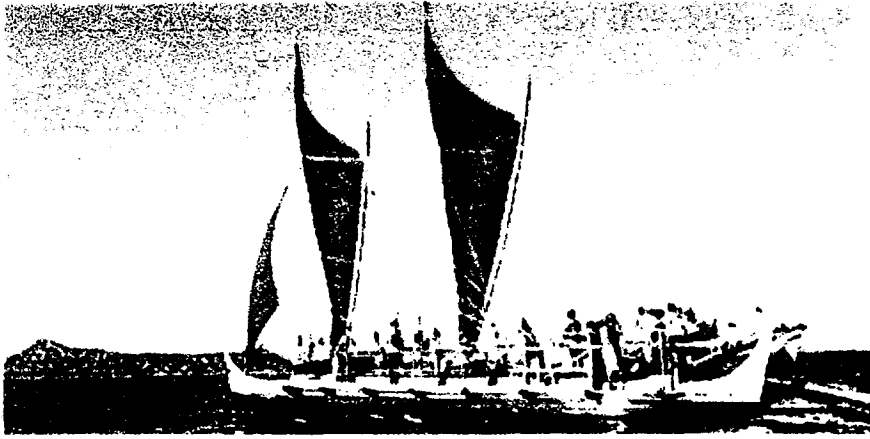
航海の技術者は、スティックチャートと星、波、潮流、風、雲、鳥などを情報源として、海の動きを読み、航海していたそうです。当時、航海に用いられた船は、シングルアウトリガーの帆走カヌーでした。

1975年沖縄海洋博に、ミクロネシアのサタウル島から「チェチェメ二号」が、古代航法でやってきました。



チェチェメ二号

ポリネシアではその昔、南米から人々が殖民して現在のポリネシア人になったという説がありました。しかし、1975年ハワイで建造された、双胴の帆走航海カヌー「ホクレア号」の検証航海により、今日では、東南アジアから人々がやって来たと言うことが定説になっています。



ホクレア号

古代ポリネシア人たちは、古代の航法で数千キロメートルに及ぶ遠洋航海を行っていたと考えられています。

古代ポリネシアの航海カヌーは「ホクレア号」のような二つのカヌー船体を並べ、その間にデッキを設置し、帆を張った双胴帆走船と、ミクロネシア人が用いていたような、シングルアウトリガー帆走船の双方を使っていたようです。

「ホクレア号」は、今年ハワイから日本への実験航海も成功させました。日本でも「ホクレア」と同じ形式の航海カヌー「カマクラ」を建造し、航海を続けるそうです。「カマ・ク・ラ」とは、ポリネシア語で「昇る太陽の子ども」という意味もあるそうです。

メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアにおいて、船の構造上の違いは多少あるものの、基本的には、アウトリガーの帆走カヌーを用い、高度な航海技術を駆使していたことは共通しています。

インドネシアからハワイ諸島、イースター島にかけて、無数に点在する離島において、太古の昔から、自然の力と人間の力だけの帆走カヌーで、大海原を駆け巡った一大海洋文化圏が、存在したことが考えられます。

そして人々は、その文化圏で、東南アジアからポリネシアへと拡散して行っ

